

介護保険料の負担感に影響する要因の分析

岡山大学 岸田研作、鳥取大学 谷垣静子

【目的】本稿の目的は、介護保険料の負担感に影響する要因を明らかにすることである。先行研究では考慮されていなかった同時決定バイアスに対応した推定を行う。

【方法】対象は山陰地方の中規模都市 A に在住する 890 人の要介護認定を受けていない高齢者である。調査時期は 2005 年 3 月で、A 市の介護保険課の協力を得て行われた。介護保険料を「妥当」と考えるか「高い」と考えるかを被説明事象とするプロビットモデルを推定する。説明変数には、要介護状態となるリスクの認知を含む。リスク認知の指標は、「あなた自身やあなたのご家族が、寝たきりや認知症（痴呆）になるかもしれないと不安に思うことがありますか」という質問に対する回答（「よくある」(4)、「時々ある」(3)、「あまりない」(2)、「まったくない」(1)）で、1~4 の値をとる。リスク認知は、従属変数と同時決定の関係にある可能性がある。観察不可能な要因として、危険回避の性向が考えられる。そのため、本稿では操作変数法を用いた。本稿の場合、操作変数は、リスク認知には影響するが、介護保険料の評価には、リスク認知を通してのみ影響する変数である。そのような変数の候補として、生活習慣病数と家族が介護保険のサービスを使った経験の有無を用いた。

【結果】現在の介護保険料の額を概ね妥当だと考えている者は 30.0%であり、70.0%は高いと考えていた。すべてのテストが操作変数法の妥当性を支持した。通常のプロビットモデルを用いた結果では、リスク認知の指標が 1 単位増加すると、保険料負担が妥当だと回答する確率が 5.2%ポイント増えた。それに対して、操作変数法を用いた結果は、リスク認知が 1 単位増加すると、保険料負担が妥当だと回答する確率が 19.0%ポイント増えた。第 5、第 6 段階を除いて、保険料段階が高くなるほど、保険料負担を高いと回答する傾向があった。保険料段階に関わらず、介護リスクを低く評価する者が保険料負担を妥当だと考える確率は 10%前後しかなかった。

【考察】操作変数法を用いない推定は、同時決定バイアスがある。大半の人が現在の保険料水準を高いと考えていた。リスク認知の度合いによって、保険料負担を妥当だと考える度合いは大きく異なり、介護リスクを低く評価する人に保険料負担を納得してもらうのは非常に困難であると考えられる。それ故、若年層への保険料賦課は、強い反発を招く可能性がある。介護保険料は応能負担であるが、被保険者自身は必ずしもその原則に納得していない可能性がある。